

巻 頭 言

紀要委員会 委員長 吉田博子

時代の進運に遅れるな、有^う為^いな人間となれ。

これは、校祖・輪島^{わじまもんじょう}聞^{きこ}声^{こゑ}先生の言葉である。輪島先生は淑徳女学校、淑徳高等女学校の創立者・監督として教育の実際に当たられ、平素より「淑徳漲美／世のため人のために尽くそうとして努力してやまない真摯^{まじ}な生き方」について生徒に語り、「常に視野をひろく、ゆく末を正しくみつめ、刹那^{せつな}を努力してゆく以外に道はない」と話しておられたという。

今から114年～94年前、明治25年（1892）～明治45年（1912）の女子教育において、こうした思考がなされたことに深い感銘を覚える。

いまさら言うまでもないが、本学は、淑徳高等女学校の50余年の教育的評価の上に、社会福祉の先覚である学祖・長谷川良信先生のご熱意によって戦後まもない昭和21年に淑徳農芸専門学校として創設され、学校教育制度改革にともない昭和25年に淑徳短期大学に転換し今日に至っている。

本学は、大乘仏教の精神「利他・共生」の教えのもと「社会に貢献できる人材」の育成を目的として設立され、来年度、創立60周年を迎える。その誇りと責任を胸に刻み、教育と研究の両面の充実に寄与していかねばならないという思いを強くするものである。

今、教育は変わりつつある。教育だけでなく、社会のさまざまな分野において改革が求められている。しかし、変わらないものもある。それは「人は“学び”を求めている」ということである。

本学の役割は、専門的な知識や技能を伝達するだけでなく、学問へのイニシエーションとともに、学び・知の主体としての自己を確立し、それを社会に開かれたものにする、その喜びを伝えるということにある。

このたび、本学『研究紀要』45号に計9編の論文の収録ができた。

この紀要の刊行が契機となって、関連分野への刺激となること、文化の創造に寄与することを願うとともに、直接的にはこれが本学の教育を実り多いものとしていくことを期待している。

平成18年（2006）2月